

Grice 再考：発話理解の諸条件に関する一考察

広島大学大学院 平 本 哲 嗣

1. はじめに

ここ近年、英語教育においてコミュニケーションの持つ重要性が大きく主張されるようになってきた。従来のような文法指導のみならず、学習者が実際に目標言語を使用し、その発話を理解し、他者と意志疎通ができるような指導が望まれてきているのである。本稿では発話理解の過程をH.P.Griceの提案した「会話の含意」の概念に基づいて論じ、発話を理解するとはどういうことを意味するのか、またそのための条件とは何かということを考察し、学習者にとって必要とされる能力を明らかにしていく。

2. 「会話の含意」概説

コミュニケーションを行う際、私たちは少なくとも二つのことを行っている。Grice (1967a, 1987a)によれば一つは何かを実際に言うこと(say)、そしてもう一つはそれを言うことによって、何かを含意すること(implicate)である。Levinson (1983, pp.97-8)に以下のような例がある。AとBとの会話で、

- (1) A: Can you tell me the time?
B: Well, the milkman has come.

というやり取りがなされたとする。しかし(1)のやり取りでは、表面的な意味より更に多くのことが含意されていることは明らかであろう。もし、我々がこの会話の中で感じる内容が正確に記述するならば以下のように言い換えることができるであろう。

- (2) A: Do you have the ability to tell me the time of the present moment, as standardly indicated on a watch, and if so please do so tell me.
B: No, I don't know the exact time of the present moment, but I can provide some information from which you may be able to deduce the approximate time, namely the milkman has come.

Griceの定義によれば(1)は実際に言われたこと(what is said)であり、(2)は含意されたこと(what is implicated)である。この例が示すように、我々は実際に言われたことよりも多くのことを相手に伝えているのである。コミュニケーション能力を習得するにあたってこのことは非常に大きな重要性を持つ。すなわち学習者はただ単に文法的な文を作ることを要求されるのみならず、それを用いて何かを含意する能力を獲得する必要があるのである。

それでは、我々はどのようにして、あることを含意したり、また他人の含意することを理解するのだろうか。Grice (ibid.) は会話というものはある種の協調的な行為であると主張し、それはある原則によって支配されていると論じた。彼はその原則は「協調の原理」とその下位規則である「会話の格率」によって構成されていると主張した。その内容は以下のようなものである。

(3) 協調の原理 (The co-operative principle)

会話のそれぞれの段階で、自分が参加している会話のやり取りの目的とし、目指しているものとされているものによって必要とされるような貢献をすること。

質の格率 (The maxim of Quality)

会話に対する自分の貢献を真実のものたらしめること。特に、

- (i) 偽と信じていることを言わないこと。
- (ii) 十分な証拠のないことを言わないこと。

量の格率 (The maxim of Quantity)

- (i) 会話のやり取りで当面の目的となっていることに必要とされるだけの情報を提供するように心がけること。
- (ii) 必要以上に多くの情報を提供しないこと。

関連性の格率 (The maxim of Relevance)

自分の貢献を関連性のあるものにする。

様態の格率 (The maxim of Manner)

はっきりと明確に言うこと。

- (i) 不明瞭な表現を避けること。
- (ii) あいまいさを避けること。
- (iii) 短く言うこと。
- (iv) 順序よく述べること。

会話の参加者はこれらの規則に従いつつ、コミュニケーションを行うのだとGrice は主張した。

Grice のこの主張で大切な点はたとえ表面的には我々がこの規則に従わないとしても、深層ではそれを順守しようとし、そのつじつまを合わせるために、語用論的推論を行うのである、と主張したことである。(1) の例を取れば、Bの発話は明らかに、少なくとも量と関連性の格率を破っている。しかし、我々はBの発話を無意味な発言とはとらない。なぜなら、Bの発話が表面的にこの規則を破っていることが刺激となって、聞き手である我々は筋の通るような解釈に至るべく、語用論的推論を行うからである。Grice はこのような推論を経た含意を「会話の含意」(conversational implicature)と呼んでいる。我々は以下のように、Grice のこの装置を利用しつつ、実際に言われたことをもとにして、話者が含意したことを理解するのである。

(4) what is said $\xrightarrow{\hspace{10em}}$ what is implicated

↑

協調の原理・会話の格率

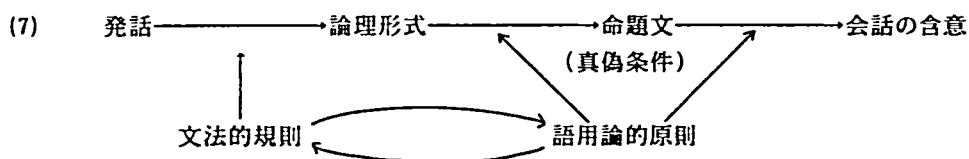
しかし、この発話理解の過程モデルには問題があるとすぐに分かる。たとえば次のような発話からはどのような会話の含意が得られるであろうか。

- (5) (i) He is very moderate.
 (ii) A: We're proud of the high academic standard of the students of this year. I think most of them are bright enough to pass the exam. Do you agree, John?
 B: All of the students didn't pass the exam.
 (iii) A: Both John and Bill are conceited, aren't they?
 B: John thought those pictures of himself were very nice, and Bill ϕ , too.

(i) では 'He' が誰を指すかによって、得られる会話の含意は異なる。もし 'He' が John Major であれば、それは *assertion* となるであろうし、もし Hitler であれば、B の発言は *irony* と取られるであろう。また、(ii) では B の発言の曖昧さが問題となる。この発言は「すべての学生がその試験に通らなかった。」というふうにも理解できるし、「すべての学生がその試験に通ったわけではない。」というふうにも解釈できる。この場合、前者の解釈のみが、「いいえ、同意できません。」ということを含意できる。(iii) では B の発言で Bill は、John または自分の写真をいいと思っているという二通りの解釈が成り立つ。この場合、後者の解釈でなくては A に対して「まったく賛成だよ。」ということとは含意されない。すなわちここで問題となっているのは発言を理解する過程は上の (4) で示されたように、単純ではなく、実際に言われたことを決定する段階において、すでに何らかの形で、語用論的要素が作用しているということなのである。Carston (1988, p.167) は Grice (1967b, 1987b) の考えに基づき、我々が実際に言われたこと (what is said) を理解する際には少なくとも以下の五点を明らかにする必要があると主張した。

- (6) (1) reference assignment
 (2) disambiguation
 (3) specification of vague terms
 (4) supplying empty grammatical categories
 (5) building in certain relations between events and states

これらの要素は明らかにその決定において語用論的な過程を必要とする。したがって従来考えられていたように、発言を完全に意味論的に解釈→語用論的解釈という簡潔なモデルは採用できないことになる。この時点で、我々は発言理解の過程のどの部分を分析するべきか、という問いにたどり着く。Levinson (1983) では、彼は様態の格率による会話の含意以外はすべて何らかの論理形式 (logical form) の指定を含む意味表示 (semantic representation) のレベルから読み取らなければならないということを論じている。彼はその後この説を発展させ、Levinson (1987a, 1987b) では意味表示のレベルと、真偽条件のレベルにおいて、語用論的推論が必要とされる、と主張している。Levinson の説を参考にしつつ、(4) の発言理解の過程を修正したものを以下に図示する。



このことは英語教育に対してどのような意味を持っているのであろうか。第一に、学習者は発話を理解するために、文法的な知識を持っていないといけない、さもないと発話の論理形式を再現することができない。第二に学習者は論理形式を命題文にするための語用論的知識も必要とする（この段階では上で挙げられたreference assignmentなどの五つの要素を明らかにする必要がある。）。第三に命題文から会話の含意を得る知識も要求される。この三番目の知識は上で述べたようにGriceの理論で説明できる、だが二番目の知識はどうであろうか。これもどうやら（少なくとも部分的には）この語用論的推論のモデルを用いて説明できるように思われる。本稿ではreference assignmentを例に取り、指示詞の照応関係がどのように決定されているかを考察する。次節では照応詞理解で作用する語用論的推論のモデルを、Griceの理論を修正しつつ提示する。

3. 語用論的推論モデル（改訂版）

本節では上で述べたGriceの理論を再検討し、更に簡潔で、かつより強い説明力を持つ理論を提示する。本稿ではNeo-Grice派の流れをくむHorn (1984)、Levinson (1987a, 1987b) およびAtlas & Levinson (1981)の展開している語用論的推論の理論を紹介する¹。

従来からGriceの四つの格率はそれぞれの概念が曖昧で対立・重複する点が多いと指摘されてきた。その中の一つに量の格率に関するものがある²（ここに再度、量の格率を示す。）。

(8) 量の格率 (The maxim of Quantity)

- (i) 会話のやり取りで当面の目的となっていることに必要とされるだけの情報を提供するように心がけること。
- (ii) 必要以上に多くの情報を提供しないこと。

よく見れば分かるように、この二つの副格率は対立している。Levinson (1987a, 1987b)はこの点に注目し、この二つの対立する格率から、更に一般的な語用論的推論のモデルを提案した。上の二つをそれぞれQuantity 1、Quantity 2と呼ぶならば、Quantity 1はQ-原則、Quantity 2はI-原則となる。その内容は以下のようなものである。

(9) Q-原則

話者の格率：世界に関する知識が許すよりも、情報的に弱い陳述を、もしより強い陳述がI-原則に反しなければ、与えるな。

聴者の推論：話者が自分の知っていることに関して最も強い陳述を行ったと考えよ。したがって、

- (a) もし話者がA(W)を主張し、そして(A(S), A(W)となるように)、〈S, W〉がHorn scale³を成すならば、 $K \sim (A(S))$ と推論できる。すなわち、話者はより強い方の陳述が事実に反するということを知っている。
- (b) もし話者がA(W)を主張し、より強いほうの陳述A(S)であれば含意するであろう埋め込み文QがA(W)が含意することができないならば、 $\sim K(Q)$ と推論できる。すなわち、話者はQが通用する (obtain) するのかどうか知らない。

(10) I-原則

話者の格率：最小限化の格率 (The Maxim of Minimization)

「必要なだけしかいうな。」すなわち、意志疎通の目的を達成するのに、最小限十分な言語情報を産出せよ (Q-原則を念頭に置いて)。

聴者の推論：強化規則 (The Enrichment Rule)

最も明確な解釈を見つけることによって、話者の発話の情内容的内容を、話者がm-意図⁴したと判断する点まで、拡大せよ。

特に：

- (a) 指示対象または出来事の間には典型的な関係が成り立つと、もし (i) このことが当然とされていることと一致していなかったり、(ii) 話者が最小限化の格率を冗長な表現を用いることによって破っていなければ、想定せよ。
- (b) もし、当然とされていることと両立するなら、文が関するところのものの存在と現実性を想定せよ。
- (c) 言及される存在物を増やすような解釈は避けよ (照応上の儉約を想定せよ。)。特に、縮小化されたNP (代名詞、ゼロ代名詞) の相互照応的な解釈を志向せよ。

要するに、Q-原則は「できるだけ話せ」ということを指示し、I-原則は「できるだけだけ話すな」ということを指示しているのである。Q-原則に従った結果生じたQ-含意の例として、以下のようなものが挙げられる。

- (11) (i) Some of the students like to study TEFL.
+> Not all of the students like to study TEFL...
- (ii) John believes that there is life on the moon.
+> John doesn't know whether there is life on the moon.

またI-原則に従った結果生じたI-含意の例として以下のようなものが挙げられる (from Levinson 1987a, p.65)。

- (12) (i) 'Conjunction buttressing'
John turned the key and the engine started.
+> p and then q (temporal sequence)
+> p therefore q (causal connectedness)
+> A did X in order to cause q (teleology, intentionality)
- (ii) 'Conditional perfection'
If you mow the lawn, I'll give you \$5.
+> If and only if you mow the lawn, will I give you \$5.
- (iii) 'Bridging'
John unpacked the picnic. The beer was warm.
+> The beer was part of the picnic.
- (iv) 'Inference to stereotype'
John said 'Hello' to the secretary and then he smiled.
+> John said 'Hello' to the female secretary and then he John smiled.

- (v) 'Mirror maxim'
 Harry and Sue bought a piano.
 +> They bought it together, not one each.
- (vi) 'Preferred Co-reference'
 John came in and he sat down.
 +> John₁ came in and he₁ sat down.

Grice のオリジナルの量の格率と同じく、この二つの原則は相反する性格を持っている。それではどのような条件のもとで、これらの二つの原則は使い分けられるのであろうか。Levinson (1987b) では補助理論を用いてそれを説明しようとしている。それはHorn scaleの厳密な定義によってである。これによるとQ-原則とI-原則を比較するとQ-原則は比較的適用範囲が狭い語用論的規則であり、ある条件をQ-原則が満たせない場合はI-原則が自動的に機能する、というふうに考えられる。言い換えるならば、Q-原則はある条件のもとで、I-原則を抑制する働きがあるといえるだろう。またLevinson (1987a, 1987b) はHorn (1984) のモデルは情報量と、単なる様態を混同していると批判し、新たに上記の原則のほかに、Q/M-原則を導入した。これはQ-原則と同じく、I-含意を制限する機能を持っているが、この原則で重要な点は発話の中で有標な表現が用いられたかどうか、ということである。以下にHuang (1991, p.306) を若干修正し、Q/M-原則を示す。

(13) Q/M-原則

話者の格率：理由無しに、冗長、不明瞭で、有標な表現を用いるな。

聴者の推論：もし話者が冗長または有標な表現Mを用いれば、無標の表現Uを用いた時と同じことを話者は意味するものではない。-特に話者は典型的な連想とUのI-含意を避けようとしているのである。

Q/M-原則に従った結果生じたQ/M-含意の例として以下のようなものが挙げられる (from Huang 1991, pp.307-8)。

- (14) (i) The train comes frequently.
 +> The train comes, say, every half an hour.
 The train comes not infrequently.
 +> The train comes not as frequently as the uttering of (a) suggests;
 say, every hour.
- (ii) Sue stopped the car.
 +> Sue stopped the car in the normal manner.
 Sue caused the car to stop.
 +> Sue stopped the car in an unusual way.

要するに、Q-原則とQ/M-原則はI-原則によるinference explosionを防ぐため、ある条件(この場合、Horn scaleや有標な様態)のもとで作用し、話し手と聞き手が合理的、効率的なコミュニケーションを行えるようにするのである。

それでは、ここでこの三つの原則がどのように相互作用するのかをまとめておこう。以下の説明はLevinson (1987b, p.409) からのものである。

(15) I-、Q-、Q/M-原則の相互作用

- (i) 同じ意味関係に関する、等しく簡潔で、また等しく語彙化された言語表現の厳密な対照集合⁵ から生じる純粋なQ-含意はI-含意に対して優先権を持つ。
- (ii) 他の場合においては、I-原則が典型的な特定の解釈を誘引する（もし、(iii)が適応されなければ）。
- (iii) 同じ意味で使用できる表現が二つ（かそれ以上）あり、その中の一つが無標であり、もう一つが有標である場合。この場合には無標の形式はいつものようにI-含意を伝える。しかし、有標の形式の使用は関連するI-含意の不適合性をQ/M-含意することになる。

要するに、この三つの原則は $Q > Q/M > I$ の順に適応優先権を与えられ、発話のenrichmentに貢献するのである。次の節では本節で展開されたNeo-Gricean theoryを応用し、指示詞理解のプロセスを考察していく。

4. 指示詞理解の語用論的分析

発話理解のためには(6)で挙げた条件を満たすことが必要である。本節ではこの中の一つであるreference assignmentを取り上げ、会話の参加者がどのようにして指示詞を理解するのかを考察する（ここでは「指示詞」とは特に人称代名詞のことを指す⁶。）。

指示詞が示す内容はどのようにして決定されるのであろうか。Blakemore (1992)や今西・浅野(1990)が論じているように、指示詞自体には言語運用者の背景知識を喚起させるような言語的情報は余り無い。指示詞はテキストの中にある他の要素と関連付けられることによって、初めて理解されるのである。以下の文章を見てみよう。

- (16) Here is Edward Bear, coming downstairs now, bump, bump, bump, on the back of his head, behind Christopher Robin. It is, as far as he knows, the only way of coming downstairs, but sometimes he feels that there really is another way, if only he could stop bumping for a moment and think of it. And then he feels that perhaps there isn't. Anyhow, here he is at the bottom, and ready to be introduced to you. Winnie-the-Pooh.
(A. A. Milne: Winnie-the-Pooh, from Cook 1989, p.17)

ここで二行目の'He'の持つ言語的情報はただanimateでmaleということだけである。我々はこのテキストの中から、'He'の示す内容を理解しなければならないのである。ここではこの'He'は距離的には一番近い'Christopher Robins'を指示せず、'Edward Bear'か'Winnie-the-Pooh'と照応関係を成立させている。この例からもわかるように、テキスト内の指示詞理解には先行詞と指示詞間の距離以外の要素も作用しているように思われる。

もう一つ例を見てみよう (from Levinson 1987a, p.65)。

- (17) John_i came into the room and he_i sat down.

この場合、'he'が示すものはJohnであろう。しかし、なぜ我々はそう思うのであろうか。このことは先に述べたように、単にこれら二つの要素の距離が近いということだけでは説明できない。Levinson (1987b)、Geluykens (1989)でも論じられているように、この現象は厳密な統語的・意味論的規則というよりは、語用論的原則によってコントロールされていると考えるのが妥当であろう。

Neo-Gricean Theoryの立場からこの現象はどのように説明できるだろうか。この理論によれば二番目の文の'he'の使用は一番目の文との関係で典型的な解釈を要求するようなI-含意を行うことになる。すなわち、I-原則内の副細目である(c)にのっとり、Johnとの相互照応を行うのである。ではなぜJohnと結びつくのか。副細目(a)で述べられているように、我々は自分の世界知識を利用して、最も典型的な解釈(人が部屋に入り、いすに座ること)を行うためである。

しかしこの理論にはまだ多くの問題があるように思われる。その中の一つはある指示詞がもし複数の先行詞を持つ場合にどの先行詞を最も優位に指示しうるかという問いに対して明確に答えていない点である。この問いに対しては多くの言語学者・心理言語学者が研究を進めてきた(Beaugrande & Dressler 1981; Clifton & Ferreira 1987; Dell, McKoon & Ratcliff 1983; Garnham 1985; Malt 1985; Oakhill, Garnham & Vonk 1989; Singer 1990)。彼らの報告によると指示詞の決定に関与する要素として以下のようなものが挙げられるという。

- (18) information saliency (主にdiscourse topic)
- 世界(背景)知識
- 先行詞と指示詞の間の距離

言語運用者はこれらの要素を考慮に入れつつ、上記の語用論的原則に従ってもっとも適切な指示詞の理解を行うのだと考えられる。たとえば(16)の例では'Edward Bear'がこの文章では(前方照応的には)主要な談話情報であるし、また'Winnie-the-Pooh'が(後方照応的には)重要性を持っていると考えられる⁷。

指示詞の理解には上に示されたように、ただ単に表面的な構造(ここでは先行詞と照応詞の間の距離)よりも、より深い意味的な要素がその過程において作用していると考えられる。Dell, McKoon & Ratcliff (1983)は指示詞理解のために短期記憶から検索される情報は先行詞のみならず、文章の命題内容であると主張しており、またGarnham & Oakhill (1992)は指示詞理解の過程を心理的なメンタルモデル(Johnson-Laird, 1983)を援用して解明しようとしている。これらの立場によると、言語運用者は発話を交換する(もしくは、先行する文を理解する)ことによって、ある特定のmental representationを作り出し、その中において、(18)で示された要素を考慮に入れつつ、最も有力な候補が選ばれるということになる。

Grice (1948, 1957)および、Levinson (1983)が論じているように、コミュニケーションの過程においては、「送り手」の伝達意図は、「送り手」と「受け手」双方にとっての共有の知識(mutual knowledge)であることが想定されている。すなわち送り手がある特定の伝達意図を持っているということを受け手が知っている、またそういった受け手の認識を送り手は知っている、ということである⁸。このように伝達意図が送り手と受け手の共有の知識となる状態を達成できればコミュニケーションは成功したといえるのである。照応関係の理解の場合、送り手は指示詞を用いることによって、受け手のmental representationの中にある旧情報のうちの何かを受け手に認知させるように意図するのである。またその意図が送り手・受け手双方に共有されているとき、照応関係の理解は達成されるのである。

それでは(18)で示したような要素とNeo-Gricean Theoryはどのように関連付けられるのであろうか。原則的にはこの場合、I-原則が作用し、照応関係の解釈が行われるのだが、Huang (1991)が提唱しているように(18)の要素を制限条件として考えることができるのではないだろうか。このことをまとめると以下ようになる。

(19) (a) 解釈の原則

基本的に代名詞は相互照応的な性質を持つと想定せよ (I-原則より)。

(b) (a) によって合意された解釈には、話者のm-意図する点まで解釈が成立するように(18)で示された要素を考慮に入れよ。

以上、談話内における指示詞理解のプロセスについて試案ながらも考察を試みた。

5. 終わりに—今後の英語教育に対する示唆

本稿では発話理解における前提条件、およびそれがどのように満たされるのかを、指示詞の理解を例として取り上げ、考察した。それではここで得られた考えを英語教育において今後どのように生かすべきであろうか。まず、実践的な面では(6)で示した五つの要素を明示的に指導することが考えられるだろう。たとえばRutherford (1987)、天満(1989)で論じられているように、ある文において'he'や'it'といった表現は何を指すのか学習者に考えさせたり、文の曖昧さに対する知識を高めさせたり、省略された要素を補わせてみたり、文章中で記述された出来事を関連付けさせてみたりすることが有効であるだろう。

また第四節で論じたように上記の五つの要素を処理するモデルを提案し、日本人の英語学習者がどのような発達過程を経て、英語の語用論的側面を習得していくかという問題にも答える必要があるように思われる。また本稿での指示詞理解のモデルにはまだ多くの問題があるように思われる⁹。今後も、この研究を進め、言語運用者の発話理解能力の解明を行いたい。以上簡単ではあるが、今後の語用論研究が英語教育にもたらしうる影響について論じた。

註

1) 本稿では量の格率を基調としたNeo-Gricean Theoryについて論じたが、この他にも関連性の原則が発話理解における単一の認知原理として機能すると主張するSperber & Wilson (1986)が語用論的推論のモデルとして挙げられる。

2) 量の格率を語用論的推論の原則として拡大する理由についてはHorn (1984, pp.12-3)参照。

3) Horn scaleとはある言語表現間における意味論的内含の強弱の関係について示したものである。Levinson (1987b, p.407)はHorn scaleを以下のように説明している。

Horn scales に対する制限

(ある二つの言語表現) <S, W>がHorn scaleを形成するためには、

- (i) ある任意の文AにおいてA (S)はA (W)を内含(entail)しなければならない。
- (ii) SとWは等しく語彙化されていなければならない(したがって、conditional perfectionを妨げるようなHorn scale <iff, if>は存在しない。)
- (iii) SとWは同じ意味関係に関するものでなくてはならない。もしくは同じ意味の場

(semantic field)からのものでなければならない(したがって'conjunction buttressing'を妨げるようなHorn scale <since, and> は存在しない。)

4)ここで述べられた「m-意図する」とは'meaning intention' のことである。この概念の意味することは、話者がある信念を聴者に誘引させるような意図を持ち、その意図を聴者に認識させることによってその信念を聴者に理解させる、ということである。Strawson (1971, p.28) はこのことを以下のように述べている。

xによって何かを意味する場合、S(話者)は以下のことを意図しなければならない。

- (a) Sがxを発話することがある聴者Aの中にある種の反応rを生み出すこと、
- (b) AがSの意図(a)を認識すること、
- (c) AがSの意図(a)を認識することがAの反応rの理由の少なくとも一部分において作用していること。

この点に関して詳しくはGrice (1948, 1957)参照。

5)この対照集合の典型的な例としてHorn scaleがある。

6)三人称代名詞や、その他の指示詞は、発話が行われる場面(非言語的文脈)との関連においてのみ指示対象(先行詞)が理解されるもの(exophora)と、実際に話されたり書かれたりした文や談話(言語的文脈)の中で理解されるもの(endophora)とがある。本稿では表現の便宜上、後者の言語的文脈の中で理解される人称代名詞について論じた。しかし厳密にはこの二者を区別することは困難である。この点に関してはBrown & Yule (1983, pp.192-201)が認知的な側面から議論を展開している。

7)ここでの「主要な談話情報」や「重要性」といった概念はdiscourse topic と関連がある。しかし、このdiscourse topic という概念は非常に内容が複雑であるため、本稿では取り扱うことができなかった。これに関してはまた機会をあらためて論じたい。

8)「共有の知識」の概念には「無限の後退」の問題が常に伴う。この問題に関してはSmith (1982)、Sperber & Wilson (1986)参照。

9)たとえば明確な先行詞を持たない指示詞や先行詞と内容的に完全な同一性を持たない指示詞などに関する説明は本稿のモデルでは不十分であるように思われる。

参考文献

- Altmann, G.T.M. 1989. Parsing and Interpretation. New Jersey: LEA.
- Atlas, J.D. and S.C. Levinson. 1981. "It-Clefts, Informativeness, and Logical Form: Radical Pragmatics (Revised Standard Version)." In Cole (ed.).
- Beaugrande, R. de and W. Dressler. 1981. Introduction to Text Linguistics. London: Longman.
- Blakemore, D. 1992. Understanding Utterances. Oxford: Blackwell.
- Brown, G. and G. Yule. 1983. Discourse Analysis. Cambridge: Cambridge UP.
- Carston, R. 1988. "implicature, explicature, and truth-theoretic semantics." In Kempson (ed.).
- Clifton, C. and F. Ferreira. 1987. "Discourse Structure and Anaphora: Some Experimental Results." In Coltheart (ed.).
- Cole, P. (ed.) 1981. Radical Pragmatics. New York: Academic Press.
- Coltheart, M. (ed.) 1987. The Psychology of Reading. New Jersey: LEA.

- Cook, G. 1989. Discourse. Oxford: Oxford UP.
- Dell, G.S., G. McKoon and R. Ratcliff. 1983. "The Activation of Antecedent Information during the Processing of Anaphoric Reference in Reading." Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior 22, 121-132.
- Garnham, A. 1985. Psycholinguistics. London: Routledge.
- Geluykens, R. 1989. "Referent-tracking and Cooperation in Conversation: Evidence from Repair." Chicago Linguistic Society 25, 65-76.
- Grice, H.P. 1948 (1957). "Meaning." In Grice (1989).
- _____. 1967a (1987a). "Logic and Conversation." In Grice (1989).
- _____. 1967b (1987b). "Further Notes on Logic and Conversation." In Grice (1989).
- _____. 1989. Studies in the Way of Words. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP.
- Horn, L. 1984. "Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-based and R-based implicature." In Schiffrin (ed.).
- Huang, Y. 1991. "A Neo-Gricean Pragmatic Theory of Anaphora." Journal of Linguistics 27, 301-335.
- Johnson-Laird, P.N. 1983. Mental Models. Cambridge: Cambridge UP.
- Kempson, R. (ed.) 1988. Mental representations. Cambridge: Cambridge UP.
- Levinson, S.C. 1983. Pragmatics. Cambridge: Cambridge UP.
- _____. 1987a. "Minimization and Conversational Inference." In Verschueren & Papi. (eds.)
- _____. 1987b. "Pragmatics and the grammar of anaphora: a partial pragmatic reduction of Binding and Control phenomena." Journal of Linguistics 23, 379-434.
- Malt, B.C. 1985. "The Role of Discourse Structure in Understanding Anaphora." Journal of Memory and Language 24, 271-289.
- Oakhill, J., A. Garnham and W. Vonk. 1989. "The On-Line Construction of Discourse Models." In Altmann (ed.).
- Rutherford, W.E. 1987. Second Language Grammar: Learning and Teaching. London: Longman.
- Schiffrin, D. (ed.) 1984. Meaning, form, and use in context: linguistic applications (GURT '84). Washington: Georgetown UP.
- Searle, J.R. (ed.) 1971. The Philosophy of Language. Oxford: Oxford UP.
- Singer, M. 1990. Psychology of Language. New Jersey: LEA.
- Smith, N.V. 1982. Mutual Knowledge. London: Academic Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. Relevance: Communication and Cognition. Oxford: Blackwell.
- Strawson, P.F. 1971. "Intention and Convention in Speech Acts." In Searle (ed.).
- Verschueren, J. and M. Bertucelli-Papi. (eds.). 1987. The Pragmatic Perspective. Amsterdam: John Benjamins.
- 今西典子・浅野一郎. 1990. 『新英文法選書：照応と削除』 東京：大修館書店
- 天満美智子 1989. 『英文読解のストラテジー』 東京：大修館書店